

（ことだま）

言靈——愛甲先生の御靈に捧げ奉る

高田 友

愛甲次郎先生儀、已而十月十五日に逝去せられてありし旨、漸く知る所と相成候て、争か痛哭措く所可有之候矣。

先生に懇切なる御指導を賜るや屢々にして、茲許、我が師と仰ぎて尊崇し、恩愛顧みて落涙するの儀、筆舌以て不可盡候。

御著書「候文の手引き」は我が愛讀書の第一に候て、本書に接したるを奇貨として、候文に親しむの道を見出して候ふは早旬年の往時に御座候歟。

數年を遡るの程に候共、一日櫻新町の會合の後、全員レストランにて會食致し候折柄、偶々先生と某と先に着し、餘の會員を待つの間、親しく聲咳に接し奉ることありき。

先生近年本朝の政治・社會の倫理喪失せるを嘆き給ひ、怎んが有徳の國柄を恢弘せむと我が私見を覓め給ひて候。

一昨年正月、會報十七號の編輯に方り、照合の要ありて電話を差し上げたるの砌、小半時に亘りて親しく相語らふの機會を得たるは光榮の至りに存じ候所、先生仰せありて、

「其許、蓋ぞ文語文法の論文を纏めざる」と御勸誘有之候。

これによりて某、會報十八號に「言靈」と題して、拙劣なる文語文法論を寄稿致し候。

今、「言靈」の續篇として、「助詞『や』」の働きに就き、駄文を列ねて候へば、メルマガに掲載致さむとす。恥づらくは、些か冗長に過ぎたれば、兩回に分割して連載と致し候

儀、各位嗤笑したまへかし。

倨傲の罪怕るべきは恬然たるを得ずと雖も、冀はくは在天の先生、迢かに下人寰を俯瞰して斧正を下し給はむことを。

令和五年十二月

「や」の諸様相（第一回）

助詞「や」は、文語の凡ゆる單語の中に、蓋し其の様相多様なること、之に過ぐるはなかるべし。英語の *or* を聯想せしむる様々なるタイプあり、解釋せむにも迷ふ所尠なからず。

まづは、疑問文を作る「や」を、相通あひずる「か」と關聯せしめて説かむとす。疑問文を作る「や」には終助詞および係助詞あり。

疑問の終助詞「や」は、「か」と並列せらるる所なれど、「や」は終止形に付き、「か」は連體形に付く。

口語の「落ちる」(上一段活用)は、文語にては「落つ」。上二段活用なれば、終止形は「おつ」、連體形は「おつる」。口語にて「花が落ちるか」と訊くは、文語にては「花落つや」または「花落つるか」と言ふ。

而して、一方に係助詞の「や」と「か」あり。

係助詞の「や」を用ゐれば、「花や落つる」なり。「や」の先に存するがゆゑに、文末に係り結び生じ、連體形を取りて「落つる」となる。

係助詞の「か」を使へば、「花か落つる」となるべけれど、この形は頻用せられず。係助詞の「か」は「誰たれかある」の如く(後述)、疑問詞の後に付くを専もらとす。

今述べたる《疑問詞》なる用語も些か訝しき所なるが、今假かりに之を用ゐなむ。

英語にては *who* は《疑問代名詞》、*why* は《疑問副詞》なり。併せて《疑問詞》と謂ふ。これに倣ひて、「誰」を疑問代名詞、「いつこ」を疑問副詞と稱ふるも可ならむ。

係助詞「か」は「誰かある」「いつくにか行かせたまふ」杯など、疑問詞に後置するが常なり。

「羅蕾菜(ローレイ)」冒頭の歌詞は「なじかは知らねど」。

「なじ」は「なぜ・など(why)」の變形。而して之に係助詞「か」の付きたるなり。「なぜかは知らないけれども」の意。

留意すべきは、「なじかは知らねど心侘びて、昔の傳へはそぞろ身に染しむ」と續けども、「か」なる係助詞ありといふに、連體形「染むる」にて結ばで、「染む」なる終止形にて文の終る所なり。

さは、隠れたる言の葉あればなり。「なじかはかくある、知らねども」と言ふべし。隠れたる「かくある」の「ある」、即ち連體形にて、これにてぞ結べる。「身に染む」は「なじかは」とは懸隔して、これに呼應するを得ず。かく係助詞ありて、結びの失はれたる形を「係り結び流れたり」と言ふ。

この一節は「何ゆゑかくあるかは知らねども、心寂しく覺ゆ。昔の傳へ(ローレイの傳説)、はからずも身にしみて悲し」とは言へるなり。

これに對して、疑問代名詞、疑問副詞の後に「か」ならで「や」を付けて、「誰やある」「なじやは知らねど」とするは、過てりと斷言するは憚りあれど、少なくとも現代人の文語作文には避くべしとこそは思ほゆれ。

却りて、疑問詞ならざる名詞・代名詞・副詞に係助詞「か」を付けて、「△花か落つる」といふも好ましからず。「花や落つる」の方優れたりといふべし。

(二)

「や」を用るれば、「花や落つる」といひ、或いは「花落つや」といふ。いづれも可なり。

それがしの私見なれど、「花や落つる」の形こそ上代本朝の言ひ様ならめ。「花落つや」は、漢文の語法を真似て、後世發達したるにあらざや。

漢文にては、疑問詞なき疑問文（一般疑問文）の場合、文末に、「耶・矣」などを付す。現代中國語にては「嗎・吗」(ma)を以て替ふ。You love me.は「你愛我」なれど、一般疑問文 Do you love me?は「你愛我嗎?」とは言ふ。

この中國語（漢文）の語法を習ひたる上代本朝の人、前方なる「や」を「耶・矣」の類なりと察して、文末に移したるに非ずやとは我が愚考する所なり。

「や」前方にある時は係り結びをせずとの複雑なる文法體系の構築せられたるを見ても、「花や落つる」の方、古き形なりとぞ察せらるる。

而して、今一つ。これも我が獨斷・偏見なるべけれど、日本語本來の語法と中國語（漢文）由來の表現とは、さらに分化して、若干の齟齬出來したりと思はる。

(A)「花や落つる」は口語「花は落ちるか」に近く、(B)「花落つや」は「花が落ちるか」に對應するに非ずやとは察せらるる。

(A)は「舊情報の花」にして、「ほら、お前の知っているあの花は落ちる(落ちた)のか」と言ひたるにあらざや。(B)は、ポトツといふ音を聞きて「花が(花でも)落ちたのかな」と「新情報の花」の儀なるべし。

「林檎を食べるか」と訊くときは、「林檎や食ふ」「林檎食ふや」「△林檎か食ふ」「林檎食ふか」^{など} 抔といふを得む。(「食ふ」は終止形も連體形も「食ふ」)

(三)

疑問の形の文そのまま《反語》を表すもあり。

母、子に向ひて「なんで勉強しないの」と言ふは理由を訊くにはあらずして、「勉強しなさい」と命ずるなり。英語にても Why don't you study? = Why not study?は、左様な意。かからむをしも《反語》とは言ふ。肯定の疑問文そのまま否定を表し、否定の疑問

文、肯定を表すなり。「なんで勉強しないの」は否定の疑問文。これを「勉強しなさい」なる肯定の命令文として用ゐてあり。

文語に譯せば、「何ぞ學ばざる」。「何」なる疑問詞に「ぞ」の付ける。「何か」「何かは」と言ひ換ふるを得。されど、「何や」は避くる方よからむ。すでに述べたる如く、疑問詞に「や」の後置するは好ましからざるに由る。

さらに、「ぞ」なる係助詞あるによりて、文末は「せず」ならで連體形「せざる」にて終る。疑問詞の後續する「か」の「や」に代はるは稀なれど、「ぞ」に代はるは屢々見らるる所なり。

「誰か故郷を思はざる」と歌へり。「誰が故郷を思わないであろうか」なる否定の疑問文轉じて「誰もがみんな故郷のことを思うものだ」と肯定の意を持つに至る。

相反して「誰か知らむ」と言へば、「誰が知っているであろうか」となる肯定の疑問文轉じて「誰も知らないであろう」てふ否定に變じたり。

かかる語法を《反語》と言ふ。

總じて、「疑問の場合は『か』、反語の場合は『や』を付けるの段多し」と文法書にあり。しかれども、「段多し」と言へるのみにして、例外多ければ、この定義にさほどの信を置くべからず。

(四)

聖書に、基督キリストの奇蹟の話聞ききたる信仰淺き弟子、「いったいどうしてそんなことあるはずがあるうか」と疑問を呈するあり。文語聖書にては、このセリフは「いかでかかることどものあり得べき」と譯したり。

「いかで」は「どうして・どのようにして」。英語なりせば how ならまし。

「いかで」即ち、疑問副詞なり。

文末は終止形の「べし」ならで、連體形の「べき」を用ゐる。古文教師の中には、「疑問文だから連體形になる」と教ふる方々あり。さは、過ちにてはなけれども、少しく説明を加ふれば、疑問詞疑問文には、「か」の隠れたること多しと教ふべし。ここにては、「いかで」は「いかでか」と同じ。「か」の「省略されている」とは言はずとも、「隠れている」といふは可ならむ。「いかでか、かかることのあるべき」と「か」を三つ並ぶるも同じと言へば理解に寄與すべけむ。

(五)

この「いかで・いかでか」は、口語なれば「いったいどうして」といふほどの義。英語を用ゐれば、How can it be that SV?とすべきか。

抑々、口語にても「いったいどうしてそんなことのあるはずがあるか」と言ふに、「いったいどうして」はこれなくとも自づから意通ず。然則、省略して、「そんなことのあるはずがあるか」と言ふもよからむ。

文語の「いかで(か)」にても、これを省略して、「かかることどものありうべき」とのみ言ふを得べし。

換言すれば、疑問詞なき疑問文(一般疑問文)にても、反語を作るを得。而して、これまた連體形にて終るものあるは、「か」「や」などの隠れてあればなり。

漢文に「豈」なる疑問副詞あり。「豈圖らむや」といへば、「そんなことをどうして豫想したであろうか。いや、豫想なんぞしなかつた」と反語を作る。

「豈」も「いったいどうして」と譯すを得るも、これまた反芻して攷ふれば、「圖らむや」とのみ言ふともよく解するを得べし。前述の「いかで(か)」と同様に省略可能なり。

因みに、「あに」は「なに」の變形なりとの由。宜なるかな、「なに圖らむや」と言ふとも、「なに」は「いったいどうして」の意なりと解釋するを得む。

「豈に圖らむや」と「に」を加へて書くの儀多かれど、その起源、「何」と同じなれば、「に」は不要といふべし。「豈圖らむや」とすべしとの義なり。

漢文・文語の文を讀みて、「豈」の難解なれば、「豈」はなきものと思ひて解釋すれば理の通ること多し。

(六)

「忘れめや葵を草に引き結び假寝の野邊の露のあけぼの」は式子内親王の御歌。「忘れめや」は「忘れるだろうか、いや決して忘れることはない」なる反語なり。

「言はめやも」「思はめや」も「言うだろうか、いや言わない」「思うだろうか、いや思わない」なる反語なり。

この「めや」は萬葉文法の名残にして、平安以降にては「や」は終止形に付くに由りて、「むや」となるべき所なれど、萬葉にては「む」の已然形「め」に付きて、「めや」となること多し。「めや」の形になりたる時は、通常の疑問文ならで、必ず反語の意になるとは知るべし。

萬葉集・山上憶良に、「銀も金も玉も何せむにまされる寶子にしかめやも」とあり。「如く」は「匹敵する」。

「寶物として子供に匹敵するほどのものがあろうか」即ち、「子供が何よりも大切だ」とは言へり。平安以後なれば、「しかむや（も）」となる所なれど、萬葉文法にては、「むや」を「めや」とは言ふ。

式子内親王「忘れめや」の歌は平安末期より鎌倉初期にかけての歌なれど、かかる常套句の場合は、かかる時世になりても、就中和歌に於ては、一部萬葉文法の残存してありき。

(七)

但、この《已然形＋『や』》の形は、今一つの型あり。

「もししきの大宮人はいとまあれや櫻かぎして今日も暮しつ」は、萬葉・山部赤人の歌。「お役人は暇だからなのだろうか、今日も櫻の花を髪に挿して遊び暮している」との皮肉なる歌なり。尤も、さやうなる階級史觀に訴へずとも、單に「お役人は今日は仕事が暇なのだろうか」なる輕きに解しても異なるの儀はなかるべし。とはいへ、「今日も」と「も」のあるを見れば、畢竟皮肉ならむか。

「いとまあれや」は、「や」を「ば」に替へて「いとまあれば」とすれば、「暇があるの」の意味なり。而して「ば」に「や」の入れ替はれるなり。「あるからなのだろうか」といひて、いはば理由を疑問にしたる形といふべし。「あればや」と「ば」「や」の雙方を用ゐむとも同じ意味なりと申さむか。

このタイプにては、前述の「めや」とは違ひて、《已然形＋『や』》の「や」を「か」にするも差し支へなし。

「芦邊より満ち來る潮のいやましに思へか君が忘れかねつる」（山口女王）も萬葉にて、「満ちて來る潮がだんだんと増してくるように思いが募るからだろうか、あなたのこととをどうしても忘れることができない」の意。「思へか」は「思へや」と同斷、「思うからだろうか」の意なり。

ここにては、前に「か」の存するによりて、文末は「かねつ」ならで、連體形の「かねつる」を選びたり。

(八)

「その言うことはよい（よいことを言うものだ）」といはむ時に、「その言やよし」といふ言ふ成句あり。前に「や」のあるに、何條文末の連體形「よき」にならざる。

新古今・家隆の歌に「鳩の海や月の光の移ろへば波の花にも月は見えけり」とあり。

第一句末に「や」を置く。文末は連體形の「ける」にならむと思はるるに、終止形の「けり」にて終れり。

思ひきや、この「や」、係助詞にはあらで、《間投助詞》なりとは。辭書には「感動を表す」などと記せるもあり。

また愚見を申せば、《主題提起》の働きをするが如くに察せらる。英語の as for, as to また when it comes to などの類にして、「〜についていえば」といふが直譯ならむか。「その言やよし」とは、「あなた（彼）の發言についていうならば（それはいい）」とぞ繋がれる。

この「や」を俳句にては、《切れ字》と言ふ。「感動・詠嘆を表す」もしくは、「強く言い切る」など扱とも説かる。

「奥の細道」に、

汐越しほこしや鶴はぎぬれて海涼し

なる句あり。やはり「涼し」てふ終止形にて終れるなり。これをしも切れ字といふ。

「や」の外に、「かな」と「けり」も切れ字と呼ぶる。

不可思議なるかな。俳句にては、係り結びの用ゐらるるは極めて稀なり。特に「奥の細道」の全六十三句には、係り結びは悉皆存することなし。

名月なづきや北國きたくに日和定めなき

のみは、「や」ありて、連體形「なき」にて結べども、この「や」係助詞ならざるは、疑問の意にあらざるによりて明らかなり。（係助詞「や」「か」は例外なく疑問反語の意）

ここにて連體形「なき」を使へるは、單なる餘情表現といふべし。「なし」に替ふるとも大過なし。

また、「奥の細道」の俳句にては、係り結びは用ゐられざるも、本文にては、「いづくのほどにやと思ひしを今日この柳の下にこそ立ち寄り侍りつれ」など扱と係り結びの用ゐらるるあり。

山縣有朋の「西郷隆盛君の幕下に啓す」といふ書翰文あり。西南戦争に敗れて城山に立て籠りたる西郷に對して、かつて咫尺しせきせる山縣の贈れる文ふみなり。山縣は長州、西郷は薩摩なれば、微妙なる間柄にてはあれど、かつては上司の如くに近侍して、山縣は西郷を尊崇すること甚だしきものありと傳へらる。然しからばすなはち則、切々たる戀慕を込めて、「已哉。君、今や晩節を汚さずして自裁すべし」と勸告してあり。山縣は西郷を「君」と呼ぶも、親し

き友人として呼掛くるにはあらず。かつての「君」なる代名詞は相當なる敬意を含みてありき。

その中に、「有朋が君を知るの深きを以て、又君が爲悲しむや切なり」とあり。「君のため悲しむこと（ことについて言えば）切實である」と嘆きたるなり。前に「や」の存するにもかかはらず、文末は「切なる」にはあらで「切なり」と終る。この「や」、係助詞にはあらで、《切れ字（主題提起）》の間投助詞なればなり。

同じ書翰中に、「人情の忍ぶ可からざる所を忍ぶや、未だ此戦このたたかひより甚しきはなし」とあり。これまた同斷、「人情の耐えがたいことを耐えるのは（耐えることについて言うならば）、この戦争よりもひどいものはいまだかつてなかった」との義なり。「や」ありて、

「なき」にあらで「なし」にて終はれるを注視せらるべし。
（本稿はスペース足らざるを以て、二回に分けて掲載す）

（令和五年十二月十五日受附）